

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-4

銀座のシンボルと言える和光の時計塔チャイムの正時前45秒から、ウエストミンスター式チャイムが鳴りはじめた後の第一打が正午を知らせた。

ダイニングキッチンで、ノートパソコンを開いて今夜の予約状況を確認していた真紀は、複層ガラスを通してチャイムの残響と共に第一打を聞くと、いつもの癖で画像右下の時間表示を見ていた。

この界限の例に漏れず、一見さんお断りの『こはる』は、人気店がゆえに予約なしでは席の確保が容易ではなかった。

マネージャー、チーママ他、数人のホステスに専用のノートパソコンを持たせて、予約管理機能のソフトを運用してもらい、席の割り振りに伴う担当ホステスや、過去のデータを基に滞留時間の予測などを任せていた。

それでも気になる事柄があれば、開店前ミーティングで適切に対処した。

席の用意ができない予約なしの客には、信頼のおける他店へ紹介することもあるし、超VIP向けに常時数席をストックしておくことで急場をしのごうもあった。

出勤前のルーティンワークを一応に済ませた真紀は、いつものように頭を空っぽにしようとしたが、目を閉じると横田の道中で垣間見せた無彩色な表情の残像に疼きを覚えた。

水晶体で屈折した後、網膜にばら撒かれた疼きの残痕は、脳内の時間旅行でワープした若狭湾の入り江に次々に打ち寄せるや否や、鞭で叩かれた競走馬のごとく沖合に引き戻されていった。

それらは数秒で統合されると蜃気楼に似た心的情景を晩秋の若狭湾の水平線に揺らめかせた。

真紀が横田のモデルを引き受けたのは、多業種の客と接する一流クラブのママとして身につけた雑学的知識の引き出しの中から、裸婦画に関する彼女なりの見識が、相手の独自の枠組みから漏れてくる狂気に触発されたからである。

真紀の良質な引き出しから、描く男と描かれる女との相互関係を、名だたる美術館の学芸員やフリーランスのキュレーターの達見を参考に取り分けてみると、中でも夭折した貧乏絵描きたちと無報酬でモデルになった薄幸な女性たちとの、後年、日の目を見ることになる作品群に纏わる論評に、彼女は大抵ガッカリさせられてしまう。